

岩手医科大学歯学学会第 40 回例会抄録

日時：平成 7 年 6 月 24 日（土）午後 1 時

会場：岩手医科大学歯学部 4 階講堂

演題 1. ラット切歯再植時における歯根膜組織の修復過程に関する病理学的研究

○佐藤 泰生, 佐藤 方信

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

ラット切歯を用いて意図的再植を行い、歯根膜の創傷治癒過程を組織学的、超微形態学的に観察し、若干の知見を得ることが出来たので、その結果を報告した。

生後 8 週齢の雄性ラット 46 匹に腹腔内麻酔を施し、右側切歯を脱臼後、抜去した。再植操作により抜去歯の歯胚組織が歯根膜に混入しないように、歯胚部分をメスで切除した後、もとの抜歯窩に復位させた。歯牙を復位させるまでの時間は概ね 1 分以内とした。また、左側切歯は対照群とした。術後 3 日、5 日、7 日、14 日、21 日、28 日目毎に屠殺し、実験動物の半数を光顕的観察、残りの半数を透過電顕的観察に用いた。

術後 3 ないし 5 日目に歯根膜断裂帯に顕著な肉芽組織の増生があり、早期に微細な血管の新生がみられた。また、そこには粗面小胞体の発達著しい線維芽細胞とともに、血管周囲には細胞小器官の発達に乏しい未分化な細胞が多数観察され、この細胞から線維芽細胞への分化の可能性と、盛んな膠原線維の産生および吸収がうかがわれた。

歯根膜の再付着がみられた部位では、術後 14 日目に歯根膜の断裂帯を区別することが出来なくなっていた。電顕的に、断裂帯には極性に乏しいものの互いに接着複合体による接合を呈する線維芽細胞群と、固有歯槽骨に埋入された膠原線維束が観察された。また術後形成された高電子密度の均一層の上にセメント質の添加が観察された。

術後歯根膜に生じる骨様組織の形成過程には増生する血管の重要性が示唆された。骨性癒着は歯牙の吸収部における骨様組織の添加と歯根膜の壊死部が骨様組織に置き変わることによる場合があった。

歯槽骨側の歯根膜には内骨膜性の骨髄組織を形成する潜在的な能力が認められ、セメント側歯根膜とは性

質の異なる組織と考えられた。

演題 2. 家兎 VX 2 移植頬粘膜癌のリンパ節転移経路に関する病理組織学的研究

○大内 治, 中山 温史, 北原 朋広
松浦 政彦, 小川 淳, 工藤 啓吾
藤村 朗*, 野坂洋一郎*, 佐藤 方信**岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座
岩手医科大学歯学部口腔解剖学第一講座*
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座**

【目的】頬粘膜癌の所属リンパ節への転移経路を追究するため我々は家兎の頬粘膜部に VX 2 癌を移植し、可墨汁硝酸銀水局所動脈内注入法を用いて、癌組織部および癌組織周囲のリンパ管の詳細な分布ならびに走行を、また墨汁の穿刺注入法を用いてリンパ管経路を、HE 染色を用いて所属リンパ節への転移の有無を観察し、癌組織とその周囲のリンパ管との組織学的関連性について検討を行った。

【方法】実験動物は体重 3 kg 前後の日本白色種家兎 40 羽を用いた。対照群では 10 羽の健全家兎を、また実験群では 30 羽の右側頬粘膜部で上下顎第一前臼歯相当の咬合線の粘膜下に VX 2 癌浮遊液を 0.1 ml (生細胞数 5×10^4 個) 移植した。観察時期は移植後 3 日目、7 日目、14 日目の 3 群とした。

【結果】対照群および実験群では同側の所属リンパ節の輸入リンパ管を経由してリンパ節内に墨粒子の流入が観察された。対照群の頬粘膜部ではリンパ管が頬筋筋束と平行に走行していた。特に実験群では腫瘍宿主境界部に比較的口径の太いリンパ管が観察され、癌の増殖と共に口径が細くなり蛇行していた。また、粘膜固有層内ではこれらリンパ管は互いに network を形成していた。また、移植後 7 日例および 14 日例では同側所属リンパ節に癌の転移が観察された。

【まとめ】対照群および実験群では反対側へのリンパ管経路は観察されなかった。また病理組織学的にも反対側へのリンパ節転移は確認されなかった。した